

瓜生吉則

専門はメディア論、文化社会学。担当科目は「メディア文化論」「マンガ文化論」など。
現在の研究テーマは、近現代日本における児童・少年雑誌の社会学、戦後日本社会におけるテレビの文化史、メディア論の方法など。

1. 専門演習の目標

自分の「好きなこと」「面白いと思うこと」を、ほかの人に伝えるための知識と技術とを具えること。数多くのテキストに当たり、深く考え、複数の人と議論を交わす中で改めて「自分の考え」を彫琢していく場として、また「読む-書く」「聴く-話す」という基本的なコミュニケーション・スキルを鍛錬する場として専門演習を位置づけたい。理論的な枠組の構築（道具の選択）と具体的な素材の分析（調理）とを独力で行えるようになることが最終的な目標である。

2. 専門演習で扱う課題と内容

「メディア文化」と聞くと、マンガやアニメ、ゲームなど、「作者」がいて、なにかしらのストーリーやキャラクターが表現されているものを思い浮かべる人が多いだろう。確かにそれも「メディア文化」ではある。だが、出来合いの「作品」だけを論究対象としてしまうのは少々もったいない。「メディア文化」と言う通り、その＜文化＞は、印刷物やテレビ、インターネットといったさまざまな＜メディア＞の形態で表現されており、情報のやりとり＝コミュニケーションのありようもさまざまである。さらに、＜メディア＞をモノに限定してしまうのも、もったいない。メイドカフェやコミックマーケットでのコスプレは「身体」を＜メディア＞として表現しているのだし、アキバやアメ村、裏原などは「街」が＜メディア＞として機能している。＜メディア＞と＜文化＞の交差点を探る、という演習テーマは、「メディア文化」の多様なありようを、そこに（擬似的にはあれ）集う人々が日々作り出し、変容させていく「出来事」として捉えることを指している。だから、対象は「何でもあり」に近い。だが、「何でもあり」だからこそ、単なる趣味や好みではない、と言うために「なぜそれなのか」「それをどのように考えるのか」についての理論的な枠組の提示、テキストや資料の精緻な読解、そして明晰な説明が求められる。感情的な賛同や反論ではなく、言葉足らずでもかまわないので、論理的な意見表明をすることを常に心がけて演習に参加してほしい。

3. 授業の進め方・内容

3回生：前期はテキスト輪読。以降も同様だが、テキスト輪読では報告者がレジュメを作成するだけでなく、ゼミ生全員が読後のコメントを事前にメールで提出した上で、議論に積極的に参加することが求められる（コメント集はゼミ時に配布）。後期はテキスト輪読のほか、年度末に執筆するゼミ論のテーマ決定、進行状況の報告を行う。それと並行して、ゼミ生はガイドランスで配布する「文庫・新書・選書100本ノック」から1ヶ月に最低2冊、2012年1月末までに最低20冊の書評レポート（各A4一枚：1500～

2000字程度）の提出を義務づける（最低20本のレポートが提出されない場合は成績評価対象外とする）。

4回生：前期はテキスト輪読と、卒業論文のテーマ決定。後期は卒業論文の執筆状況の報告を行う。

4. 必要とする知識

メディア論や社会学の基礎的な知識（人名や理論）を知っているにこしたことはないが、テレビや映画、書籍、ネットなど、さまざまな「メディア文化」事象に大いなる興味・関心を持っていること（「好き」「面白い」と思えるものがあること）が大前提となる。また、「いまここ」を考えるために、基本的な歴史知識（近代史やメディア史）もテキストの読解や議論の際に有益となる。

5. 関連する分野・科目・知識

単位を取得していなくてもかまわないが、「現代とメディア」および「基礎社会学」レベルの知識を持っていることが望ましい。

6. テキスト・参考書・機材(受講生が標準的に持つもの)

宮台真司・石原英樹・大塚明子『サブカルチャー神話解体 増補』（ちくま文庫）を春休みの課題図書とする（書評レポートを3月末に提出）。4月以降は大澤真幸『増補 虚構の時代の果て』（ちくま学芸文庫）、佐藤俊樹『ノイマンの夢・近代の欲望』（講談社選書メチエ）、マーク・ポスター『情報様式論』（岩波現代文庫）を当初の輪読文献とする予定（いずれも上記“100本ノック”に所収。ただしゼミ生の興味・関心によっては変更の可能性もある）。また、繰り返しになるが、ゼミ生には“100本ノック”から1ヶ月に最低2冊、2012年1月末までに最低20冊の書評レポート（各A4一枚：1500～2000字程度）の提出を義務づける（最低20本のレポートが提出されない場合は成績評価対象外とする）。

7. 独自に付加する選考方法

レポートに基づいて面接（15分程度）を行う。志望動機や「メディア文化」への関心、「自分の重要課題図書」の選択理由について明確に答えられるかどうかを選考基準とする。なお、面接日時についての掲示も見逃さないようにすること（面接に来なかった場合は選考対象外とする）。

8. 受講生に望むこと

「自己本位」で勉学に励みたい、「一人で」テキストや対象と対峙する知的体力を鍛え、多様な考えを持つゼミ生と切磋琢磨したいと望む学生を大いに歓迎する。社会／メディア／文化の「正しい」「ひとつだけ」の見方があると思っている学生や、「答え」を性急に求める学生、そして何より、本を読むことと考えることが苦手な学生には全く向かない演習である。